

「オネエ所長の調査ファイル」 # 25

山崎浩治

1

「女装とはうわべを女として取り繕うことではなく、新しい自分に出会う儀式なの」

「出ましたね、オネエ所長本日の格言。所長にとって女装は自分探してことですか」

「探さなきゃ見つからない自分になんて興味ないわ。あたしは内面からわき上がってくる自分と出会いたいなのよ」

「所長、ゆうべの忘年会で深酒して今朝、ヒゲ剃り忘れたでしょ？ ファンデの下からヒゲがわき上がってますよ」

「あらやだ、それはごめん遊ばせ！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とイケメン調査員の透が金沢市内の住宅街で張り込みしている。この日の市山は清楚な白いブラウスと真紅のフレアスカート、ポニーテールに白い手袋といういでたちだ。本人によると、中原淳一を意識したファッションらしい。

今回の依頼人は金沢市内のアパートで娘の陽菜(4歳)と暮らすパート明日香(22歳)である。「1年前に離婚して、娘の親権を得たが、親権はやはり、元夫が持つべきだと考え直した。親権の変更をしたいがどうしたらよいか」という相談を受け、会社員の元夫・竜也(28歳)の周辺調査をしているのだ。

明日香は高校在学中、アルバイト先の社員だった竜也とできちゃった結婚している。しかし結婚3年目、「別れたい」と娘を連れて別居。夫は「妻のわがままで離婚するなら娘の親権を渡せ」と主張して事態は紛糾した。未成年の子どもがいる夫婦が離婚する場合、親権者を決めなければ離婚できない。竜也は親権を要求することで、妻が離婚を思いとどまると考えたようだが、明日香の決意は固く、親権者指定の調停を申し立てた。

双方の主張が平行線をたどった調停は半年後に不成立、最終的に「親権は母親に」という審判を得て離婚が成立した。ところがそれから1年後、明日香は親権を変更したいと翻意したのだった。一方、竜也は職場の部下と再婚話が進んでいて、「いまさら親権といわれても困る」と渋る姿勢を見せていた。

「親権トラブルというと、子どもの奪い合ってイメージがありますが、今回のようなケースもあるんですね」

調査の合間、しみじみとつぶやいた透に、市山がため息まじりで答えた。

「最近じゃ子どもを邪魔者扱いにして親権を押しつけ合う親も珍しくないのよ」

2

「元夫は再婚直前で、あなたからの親権変更の申し出に戦々恐々としているわ。前妻の子どもを引き取ったら、再婚話がおじゃんになるんじゃないかって心配してるのよ。離婚の時に決めた娘との月1回の面接交流もほったらかして婚活に励む元夫に、娘さんを養育する意思があるか疑問

だけどね」

数日後、市山が「金沢プライベート・リサーチ」で明日香に報告している。明日香は髪も染めていないし、派手な化粧もしていない。服装も質素なものだった。いまどきの若い女性にしては珍しいな、と思いながら、市山が続けた。

「いずれにせよ、一度決めた親権は父母の都合だけで勝手に変更することはできないの。親権者を変更するには家庭裁判所の許可が要るから、家庭裁判所に調停を申し立てる必要があるわ」

「分かりました」明日香が感情を込めない声で答える。

「ねえ、あなたは どうして親権を手放したいと思うの？」

「あたしには母親は務まりません。娘と一緒に生活に疲れたんです」

どこかなげやりな明日香の口調に、市山が思わず声を張り上げた。

「親権って `子どもと一緒に暮らす権利、じゃないのよ。親が子どもを守る義務。勝手に放棄できると思わないで」

うつむいたまま、そっぽを向いた明日香の唇がきつく結ばれている。

「もし父母の両方にやむを得ない事情があり、親権者として相応しくないと裁判所が判断したら、娘さんは養護施設に入ることになる。あなたはそれでもいいの？」

それでも明日香は「娘を育てるのはもう無理」の一点張りだった。明日香が帰った後、市山が首をひねった。

「親権を手放したい女の陰には男がいるものだけど、彼女はそんなタイプにも見えない」

実際、調査の結果、明日香の生活はアパートの部屋、弁当屋と居酒屋のパート先、保育所の往復で、交際相手の気配さえなく、娘を虐待している形跡もなかった。

「こうなったら娘の気持ちを聞いてみるしかないか」

「娘の気持ちって、まだ4歳ですよ！」

驚く透に、市山がけろりと答えた。

「子どもを一人前の大人として扱う。それがあたしの主義。子どもは年齢に関係なく、親が思っている以上に親のことを考えているからね」

3

夫は調停の席で、明日香からの離婚の申し出を「青天の霹靂」と言ったそうだが、冗談じゃない。夫と結婚してから、一日だって「青天の日」はなかった。

両親が交通事故で突然亡くなったのは中学時代だ。その後、伯父の家に引き取られたが、一日も早く自立したくて高校に入るとすぐ、アルバイトを始めた。その職場で出会ったのが竜也だった。いま振り返れば、伯父の家から出るために大して好きでもない男と結婚したような気もする。

職場では温厚な性格だった夫は家のなかでは、典型的なモラハラ男だった。何か気に入らないことがあると、話しかけても無視をする。作った料理に目をくれず、これ見よがしにカップラーメンを食べるのは日常茶飯事だ。二言目には「誰に食わせてもらっているんだ？」「これだから

親のいないヤツは」と言う。セックスを断ると途端に不機嫌になって、何日も口をきかない。機嫌をとるのが面倒なので、結局、疲れていてもセックスした方が楽だと思うようになった。

家庭では暴君なのに外面はよく、会社や近所では「いい人」で通っている。そんな夫に嫌気がさして、陽菜を連れて家を出たのは結婚3年目のことだ。陽菜の親権を放棄するつもりはなかった。出産前に読んだ育児書の「子どもが3歳になるまでは母親が育てなければ、その後の成長に悪影響を及ぼす。3歳までは母親が育てるべき」という一節を信じていたからだ。

けれどシングルマザーの生活は想像以上に過酷だった。勤めたパート先はどこも、子どもがいる親に理解がなく、陽菜が急病になって休む時や早退するたび、露骨に嫌な顔をされた。ある時、陽菜が風邪をこじらせ、何日も仕事を休んだ時は収入が激減。その日の食費にも困り、100円ショップで買ったそうめんを給料日まで食べて、空腹をしのいだこともある。同級生たちが大学で青春を満喫しているのに、どうして自分はこんな惨めな生活を送っているのだろう、と思うと涙が出た。

陽菜は居酒屋の仕事を終えて夜遅く帰ってくる明日香を起きて待っている。空きっ腹を抱えているはずなのに、その日あったことを楽しそうに話す。そんな陽菜を見ていると、つくづく甲斐性のないママでごめん、と思う。

元夫は正社員で、実家には家も土地も財産もある。陽菜を世話してくれる祖父母だっている。この子は貧しい母親と暮らすより、父親と暮らす方がいい。明日香はそのように考え、親権変更をしようと決意したのだった。

4

「あなた、パートを掛け持ちしながら、いままでよく頑張ったわ。公園で遊んでる娘さんと話をしたの。『ママはいつも台所で立ったまま、ご飯を食べてる』って言った。座って食事する時間もないほど忙しかったのね」

「金沢プライベート・リサーチ」にやってきた明日香に市山が切り出す。泣き出す寸前の眼差しでにらみ返した明日香がひと呼吸置いたあと、口を開いた。

「援助してくれる親はいないし、高校中退したあたしには資格や技能ありません。単純労働のパートは掛け持ちしたって10万円稼ぐのがやっと。児童扶養手当を満額もらっても生活はギリギリです。このままじゃ陽菜が大きくなっても大学までやれない。あたしと一緒にいたら、陽菜は幸せになれないんですよ」

「陽菜ちゃんは裕福なら幸せなの？ 大事なのは、彼女が誰と一緒にいると幸せかということじゃないの？」

「あたし、立派な母親になれないんです。仕事で疲れて部屋に帰ると、まとわりついてくる陽菜に思わず『うるさい！』と怒鳴ってしまうことがあるし。いつか虐待してしまうんじゃないかって心配で」

「立派な母親になる必要なんかないでしょ。陽菜ちゃんだって、立派な母親なんて求めちゃいないわ。彼女は舌足らずな口調で一生懸命、こう話してくれたわ。『早く大きくなってママを応援

したい』って」

明日香の指がスカートの生地を強く握りしめた。

「あなたは自分の命より大切なものを捨てるつもり？ 陽菜ちゃんの親権を放棄したら、楽に生きられるの？」

明日香が弾かれたように顔を上げる。市山がずけずけした物言いで続けた。

「陽菜ちゃんがいたから、いままで頑張っただけでしょ？ いまは大変かもしれないけど、子どもと一緒にいれば、あとで振り返った時、苦労して泣いたことも、きっと楽しい思い出になるはずよ」

顔を伏せた明日香が声を立てずに泣いていることが小刻みに震える肩で分かった。

5

竜也は離婚後ほどなく「管理職になって残業代がなくなり、給料が下がった」という理由から養育費の支払いを滞らせていた。それを聞いた市山は「家庭裁判所で親権の審判がなされた際、『月4万円の養育費を支払う』と審判に記載されてるのよ。元夫がいくら『払えない』と言っても、払わなくちゃいけないものなの」と明日香に助言し、「養育費の支払いがなければ裁判所に申し立てて、給料を差し押さえする」旨の内容証明郵便を送付させた。その効果は絶大で、すぐさま明日香の銀行口座に養育費が振り込まれたという。明日香から電話で報告を受けた市山と透が「金沢プライベート・リサーチ」で話している。

「外面がいいモラハラ男だけに、給料差し押さえなんて醜態を会社にさらしたくなかったのね。あたしの読み通りよ」

「養育費が毎月きちんと入ってくれば、依頼人の生活も少しは楽になるでしょうね」

「それでも長い人生、これから先、何が起こるか分からない。だから、本当に苦しくなった時は胸を張って社会に頼りなさい、とアドバイスしておいたわ。幸せは『支合わせ』。みんなで支え合っつくるものなんだから」

それからしばらく経ったクリスマスイブの昼、市山と透が依頼人親子の様子を見に行った。メンズのトレンチコートを着ている市山に、透が不思議そうに聞いた。

「今日はどうして女装しないんです、所長？」

「これはれっきとした女装よ、トオルちゃん。トレンチコートのベルトは結ぶ。もちろん、ボタンも止めない。男装の麗人マレーネ・ディートリッヒから学んだオシャレの美学」

「所長が男装したら、ふりだしに戻ってフツーのおっさんじゃないですか！」

「あらやだ、それはごめん遊ばせ！」

クリスマス音楽がにぎやかに流れる大型スーパーの店内で、明日香と陽菜が買い物をしている。一番小さなクリスマスケーキを買ってもらった陽菜が笑顔を弾けさせていた。やがて仲良く手をつないだ二人が雑踏のなかに消えていく。

「我が子の手を握ったその手を決して離さないで」

母と幼い娘を見送った市山がつぶやいた。